

文化を保存しようとするとき

——名古屋港筏師一本乗りの保存の実践についての一考察——

井戸 聡

1. はじめに

文化財が披露される場

毎年7月第3月曜日の海の日に、名古屋市港区の名古屋港・名古屋港ガーデンふ頭一帯では、「海の日名古屋みなと祭」が開催される。例年、約30万人もの人出でにぎわいをみせるこの祭りは、1946（昭和21）年に戦後復興・名古屋港の発展を願って始められたもので、今年（2011年）で第65回目を迎えた。フィナーレを飾る花火大会が一般市民によく知られ、高い人気を誇るみなと祭のメインイベントとなっている。その他にも地元町内会や子供会による山車や神輿が繰り出されて、太鼓や鐘を鳴り響かせたり、地元女性会による流しおどりや約1,500名の踊り手による総おどりが披露されたりと地元住民が楽しみにしている行事が催されている。

2011年7月18日に開催されたこの祭りに筆者は学生数名を伴って向かった。華々しい花火やにぎやかな踊りではなく、みなと祭のプログラムの一つとして組み込まれている「筏師一本乗り大会」の方に我々の関心は向けられていた。最寄りとなる名古屋港駅に降り立ったのは昼過ぎであった。祭り会場である名古屋港周辺は、やがて夕方が近づくにつれて押し寄せてくる人々でごった返すことになる。通り沿いで、屋台を構えようとする商売人達が運び込んだ荷を解き始め、ようやく店の準備に取り掛かろうとしているところで、まだほとんど人出はなかった。会場周辺はみなと祭の開催に伴う交通渋滞を緩和するため、15時以降の交通が規制されるのだが、交通量もこの時はまだ少なかった。

駅から歩いて数分で会場に到着する。沿道には会場への方向が示された案内板が掲げられており、「名古屋市指定無形民俗文化財・筏師一本乗り大会」と記され、二人の筏師が水上で丸太を操る場面が大きく描かれている。会場となるガーデン埠頭西側船溜には、名古屋海洋博物館のシンボリック資料として南極

観測船「ふじ」が係留されているが、その北隣の海上に木材で組まれた筏が運び込まれ、水面を周囲から囲い込んでプールのように仕立てられた特設会場ができあがっている（写真1）。会場を取り囲むように観覧席と日除け雨除けのテントが設置され、徐々に観覧客も集まり始めていた。筏乗り挑戦する一般参加者の練習が始まっており、慣れない動きでバランスを崩し、時おり水中に落ちる光景は観覧客の注目を集め始めていた。

梅雨明けに近く不安定な空模様になりがちな時期に行われるこの大会は、例年天候に恵まれないことが多く、過去には台風や豪雨で中止されたこともある。この日も垂れこめた雲から時々雨がぱらつくなか、台風6号接近の影響で風が強いという天気であった。その影響で大会は当初予定していたプログラムを一部変更し、時間を短縮して早めに会場の撤収を行うということが急慮決まった。撤収した筏や木材は筏師らによって洋上を曳航され、飛鳥村にある西部木材港まで運ばれるが、それに要する時間が約2時間かかるために早めに片付けに取り掛からなければならないという事情からの判断であった。

我々の一行は大会関係者に邪魔にならないように一通りあいさつを済ませ、ある者は位置を変えアングルを変えつつカメラで大会の様態を収めようと動き、ある者は観覧席に陣取ってフィールドノートにメモを取る、というようにそれぞれ大会見学に取りかかった。



写真1 大会会場の様子

演目は「一本乗り」に始まり、途中、一般市民や留学生の特別参加による「丸太二本乗り」や「玉乗り」、木曾川上流域の付知町「おんぼい節」の演舞や「高六太鼓」の演奏などを挟みながら、「曲乗り」「ログローリング」と演技が進み、最後に「木遣」の披露という順序で進行した¹。太さ約30センチ、長さ約3メートルの丸太の上で練り広げられる技の代表は、トビと呼ばれる竿を操りながら対岸を目指す「丸太一本乗り」であり、その他にも角材を足先で回転させることで水上を進んでいく「角乗り」、籠や傘を手にしたがらの「曲乗り」などの技がある（写真2）。この大会の演目の大半は、「筏師」と呼ばれる名古屋港周辺の貯木場で丸太などの木材を扱うことを職業としている2、30人程によって演技されている。「一本乗り」とは筏師が水上で丸太などの木材を取り扱うのに必要な技術の基本的なものであるとされる。遠方から運ばれてきた原木を仕分けして集めたものを筏に組み、必要に応じて丸太や筏を移動させる貯木場での作業上必須の技術のなかから、余技として生み出されてきたさまざまな妙技が大会のなかで披露されている。大会プログラムの演技では筏師たちは一本丸太や角材に乗り、竿などでバランスを取りながら、足腰を使って廻しながら



写真2 大会での演技の様子

1 プログラムとして予定されていたのは次の通り。「一本乗り」「西瓜拾い」「角返し」「角相乗り」「駒下駄乗り」「傘乗り」「玉乗り」「おんぼい節」「特別参加による丸太二本乗り・玉乗り」「曲乗り（籠乗り）」「丸太廻し」「曲乗り（運台乗り）」「金の鯨」「高六太鼓」「ログローリング」「あば走りリレー」「木遣」

移動したり、浮かんだ木材の上を軽やかに走り抜けたりする。

荒天による強風の影響を感じさせず軽妙にこなす筏師たちの姿を見ると、割と簡単なのではないかと錯覚しそうになるが、アナウンスされている蒲郡の筏師による玄人はだしの解説に耳を傾ければ、それがどのような難しさを秘めた技であるのかが少しずつ分かってくる。天気の影響からか最初は少なかった観覧客も徐々に増え、数百人が見守るなかで次々に演目は続く。演目を盛り上げるお囃子に、時に沸きあがる歓声。特別参加の一般市民や留学生らは水中に何度も没しながらも積極果敢に挑戦している。ドイツからの留学生に聞いてみると、母国にはない伝統的な文化に興味をそそられるのだという。地元テレビ局の取材で丸太乗りを体験リポートする一幕もあった。

「名古屋港筏師一本乗り」は保存会による資料によれば、次のように紹介されている。「名古屋港の「筏師の一本乗り」技術は、名古屋や周辺の経済社会の発展に大きく貢献し、その筏を取扱うのに必要な基本的技術の伝統は古く、将来に受け継いでいかなければならない大切な技術で、現在に生きている歴史的資産でもあります」（名古屋港筏師一本乗り保存会作成による資料より）。筏師の一本乗りの技術は木曽林業との関連をもち、江戸時代初期の名古屋城築城にも関連する歴史性を有する文化財であるとされる。「古い歴史を有し、かつ、郷土色誠に豊かである筏乗りの優秀な技術は、全国に誇り得るもの」（愛知筏業連合会 1962）であり、その産業面への寄与や歴史的に古くから存在したことが確認されて1954（昭和29）年に名古屋市無形文化財に指定され、1973（昭和48）年には名古屋市無形民俗文化財に指定された。

保存の活動の「物足りなさ」

「海の日名古屋みなと祭」の催し物のひとつとして筏師の技術が見事に披露されている一幕を先に紹介した。みなと祭の花形である花火大会や山車・踊りほどの華々しさや大集客ではないにせよ、観覧に訪れた人々を楽しませ、祭りを盛り上げる「遊興」の一部を「筏師一本乗り大会」は担っている。

「筏師一本乗り大会」は遊興的イベントとしてのほかに、名古屋市無形民俗文化財としての「名古屋港筏師一本乗り」をお披露目する、「文化財の公開」

というもう一つの意味をもつ場ともなっていることを指摘しておきたい。文化が遺産化される際の重要な営みは「保存」と「公開」であるとされる（小川 2002）。名古屋港の筏師の文化は民俗資料のなかでも価値を有するもののひとつとして見做され、その文化の保存と公開を義務づけられる文化財として認定されている。ここに紹介した「筏師一本乗り大会」は、文化の保存と公開という営みのうちの「公開」のモメントであると位置づけられる。これまでも新聞やテレビのマスコミ取材が何度もあった。また、今年は天気の影響もあって観客の出足はそれほどでもなかったが、例年であれば早めに乗り込んで陣取りしたり、アマチュア・カメラマンが写真撮影に熱中するあまりに他の観覧客に対してマナーに反する無作法を仕出かしてしまうトラブルが起きたりする。それほど注目を集めているというのだから、公開に対する「需要」が存在していることが理解されよう。

文化の公開のモメントについては上述した通りであるが、では「保存」についてはどうであろうか。

保存活動としては、既述した「みなと祭」の協賛事業として開催される「筏師一本乗り大会」での年一回の演技披露が挙げられる。この演技の準備のための練習も重ねられている。

以上のような保存の営みが実践されているのにもかかわらず、関係者への聞き取りでは保存活動への物足りなさを滲ませる不全感を纏った語りを何度も聞くという経験をした²。

確かに筏師の文化を保持している担い手が高齢化し、継承の担い手となる若い次世代の人数が少ないこと、筏師の数が往時に比べて激減してしまっていることなど、保存継承への不安材料が尽きないことは否定できない。

しかし、「喪失の危機」は「民俗」にとって、ある意味で必須の要素でもある。そもそも「民俗」とは、世の中が近代化していくなかで取り残された古風な文化慣習を発見して、それに関心を抱くことを契機として「発見」され、失

2 聞き取り調査は面接法による半構造化インタビューの方法を用いて行った。調査時期は2011年6月から12月にかけてであり、計9回行った。

われかけたモノ、消えゆきつつあるモノという消滅の局面を前提としたところに何らかの価値が重ねられたものである。だから、論理的に喪失の危機を常に抱え続けるように宿命づけられているものであるといえる。

名古屋港の筏師文化が「民俗文化財」として位置づけられているということは、常に消失と背中合わせの危機的状況に置かれ続ける宿痾を抱え込んだ文化として社会的に認知されているということの意味している。

民俗文化の保存継承とは、失われかけ、消えゆきつつあるモノをどのように延命させるのかを至上命題とする問題系であり、文化の延命のためにどのような条件や手段があり、どのように注ぎ込むことができるのかという資源動員の問題のかたちに落とし込まれた具体的な問いである。この観点から、名古屋港の筏師文化の保存の担い手たちは文化保存のための条件や手段を問題として、その不利や不足を危惧して問題視しているといえる。

だが、条件や手段の「資源」のレベルの問題であるのならば、圧倒的に不利不足し、「絶滅」の危機に瀕している民俗文化は他にも幾多もある。それに比べれば、毎年多くの費用や人材を投入して、一本乗りの技を披露し続けることができている名古屋港の筏師文化は、条件や手段という文化保存のための資源に十分に恵まれている方の部類に入ると考えても良いだろう。

にもかかわらず、保存に関係する主体によって強調されていたのは、保存活動が十全には行われていないことに対する思い煩いや文化継承が困難になりつつあることへの危機感であった。他の「絶滅危惧種」のことを思えば、文化保存のための資源に恵まれている状況に安堵しつつ、そのことを言祝いで矜持を抱いてもよさそうなものであろう。だが、現実にはそうになっていない。どうしてこのような状況が生じることになるのであろうか。

小稿では文化が保存されようとする場面で、どのようなことが起きているのかについて社会学的にどのような解釈が可能かということを中心として取り上げてみたい。ここでは「名古屋港筏師一本乗り」を対象とし、この「無形民俗文化財」の文化保存の実践と、それを取り巻く状況を事例として取り扱う。文化を保存継承しようとするのは近代社会に特徴的な営為のひとつである。ここでは民俗文化の保存継承の実践がどのように行われているのかの具体的事

例に即しながら、そこにはどのような社会的な力が作用しているのか、それはどのような社会文化的な条件によって作動している実践なのかという観点から考察を進めることを試みている。

2 文化財に付与される価値

「歴史と伝統」という「価値」

ある文化が「文化財」とされるのはどのような場合であろうか。文化財とは「文化活動によって作り出された事物・事象で文化的価値を有するもの」(日本国語大辞典(傍点部筆者))であるとされる。ある文化に何らかの価値が付与されたものが文化財として成立しているということになる³。

では「筏師一本乗り」の文化においては、どのような価値が付与されて文化財となっているのであろうか。

文化財は、それが本来依存していた個別の価値づけの脈絡を越えて、より普遍性の高い価値体系のなかに位置づけられ、歴史性や文化遺産性という文脈での新たな価値づけがなされる。そうした普遍性をもった価値としては歴史／伝統／珍しさ／他者性／自然／美／芸術／技術／共同体／地域社会／国民／国家／世界／人類／人権などがある(小川 同上)。

名古屋港の筏師の一本乗りの技術については様々なところで紹介されているが、文化財として認定されている理由のひとつとされているのは、その歴史と伝統である。共通して言及されているのは、木曾の筏文化との関連性と江戸時代以来の文化伝承の歴史と伝統である。

名古屋港の筏師文化は、木曾川流域の筏流しの技術や文化と関連があるものと捉えられている。木曾山中から伐り出された木材は、木曾川や飛騨川流域の筏師によって流送されたが、その際の木材の取り扱いの技術が「一本乗り」に繋がっているという。古くは7世紀に近江の大津宮造営の際に美濃の国から出材したという記録を根拠とするなど、その発祥が歴史的に遡行可能であること

3 「現在の意味での「文化財」という言葉は明治期には存在しなかった」(小川 2007)のであり、このような文化財という考え方は極めて近代的な産物である。

が示されている。江戸時代初期、名古屋城築造にあたって資材運搬の運河として堀川が開削され、船や筏を係留する貯木池が熱田の白鳥に掘られた。ここに木材奉行所や御木材場が置かれ、堀川沿岸には木材店が軒を連ねるなど、材木の集積地となった。木材を扱う筏師達はこの周辺に定着し、筏師の技術や文化を現在に伝える淵源となったとされる。

このような古い歴史と伝統をもつ文化であるということが根拠となって、1954（昭和29）年に名古屋市から文化財の指定を受けることになったという経緯が示されている。

3 「文化財」としての保存活動

これまでの保存の取り組み

何らかの価値があると認められる文化が「文化財」として位置づけられると、その文化を保存することが期待されるようになる。例えば国や地方公共団体が文化財保護制度に基づいて文化財を指定した場合、国や地方公共団体による保存のための措置や施策が講じられ、保存活動への助成が行われることでその文化の保存が促される。

歴史と伝統という価値を有する文化であると認められ、文化財として認定された「筏師の文化」に関して、保存活動として行われてきているのが、先述した「みなと祭」における「筏師一本乗り」の公開である。

「名古屋港筏師一本乗り」には、名古屋市文化財保護条例に基づく「所有者又は管理者」として名古屋港湾福利厚生協会が認定されている。当該の文化財の保存の主たる担い手はこの協会であるとされていることになる。

この協会は名古屋港湾に関係する労働者の福利厚生に関する事柄を事業とする公益法人であり、病院や福祉センターなどの福利厚生施設を運営している。また1994（平成6）年設立の「名古屋港筏師一本乗り保存会」が存在しているが、その事務局は名古屋港湾福利厚生協会内に置かれるという体制となっている。名古屋港湾福利厚生協会は名古屋市から、名古屋港筏師一本乗り保存会は愛知県から文化保存事業の助成を受けている。

これらの保存団体の活動としては、「みなと祭」で協賛事業として開催され

る「筏師一本乗り大会」での年一回の演技披露が挙げられる。この一本乗り大会は1952（昭和27）年に第1回が開催されて以来、豪雨や台風による中止を除きほぼ毎年開催されており、今年で第54回の大会を迎えた。年に一度必ず執り行われる郷土芸能や土地の祭りのように、いわば年中行事として営まれ続けることによって継承され保存されてきたということになる。

大会の開催に向けては様々な準備が必要となる。大会で使用する丸太や角材の資材、トビやロープなどの道具類、衣装や履物、籠や傘の小道具などの調達や用意のほか、舞台となる会場を設営するために必要な資材の修理などが必要になってくる。現在、一本乗り大会を開催するのに100万円以上の経費がかかるが、その内の約7割を保存団体が負担しているという。こうした費用の工面や助成の申請、関係団体への協力依頼も文化保存活動の一部を構成しているといえよう⁴。また演技のための練習も行われており、筏師らの仕事場である飛鳥村にある貯木場の一画で、業務後の空き時間などを利用して練習を重ねている。

その他にも、かつてはモンテリオール万博（1967年）や大阪万博（1970年）、伊勢神宮奉納や津島神社での奉納一本乗り（いずれも1968年）などでその技が披露されてきたし、国内各地のイベントへの出場要請やマスコミの出演要請に応じて技術の公開を行ってきた。現在でも富山県で行われている祭りに積極的に参加出場するなどの活動が続けられている。

以上のように、傍から見れば十分に保存に貢献する取り組みがなされているように受け取れる。しかしながら、保存に取り組む関係者らの認識は違っている。聞き取りの場面では保存活動は十分ではないのだという語りを何度も耳にした。

4 「民俗」を対象とする学問である民俗学の世界では、その文化が「どのような組織で、どのような経費の捻出をもって維持がなされてきたか」という記述は、絶望的に乏しい」という状況が存在していたという（神崎 1988）。

4 保存を実践する主体の悩み

保存実践の阻害要因

保存の実践者たちは以下のような悩みを抱えている。

そのひとつは筏師を取り巻く現況である。往時は800人を数えた筏師も現在は40名程度と激減してしまったこと、筏師の文化を保持している担い手の大半が年長者ばかりとなったこと、次の継承の担い手となる2、30代の若い世代がわずか数人しかいないこと、といった状況である。800人ももの筏師がいた時というのは昭和40年代のことを指しているが、そのころに比べて現在では筏師としての仕事が激減している。名古屋港が取り扱う木材量は昭和40年代をピークに減少してきた（図1）。以前は材木が多く入ってきていたため貯木場の水面が見えないほどだったこともあったという。現在では木材の入荷量の減少によって使用されなくなった貯木場が埋め立てられ、かつてに比べて半減した。また木材の輸送形態が以前と変わってきており、輸入された木材が船から岸壁に直接陸上げされるようになったり、海外で木材加工されて製品としてコンテナ輸送で運び込まれるようになったりと、木材を水面に落として筏師が扱う機会が極端に少なくなった。昨今では貯木場経由で木材を入荷する船は月に1、2

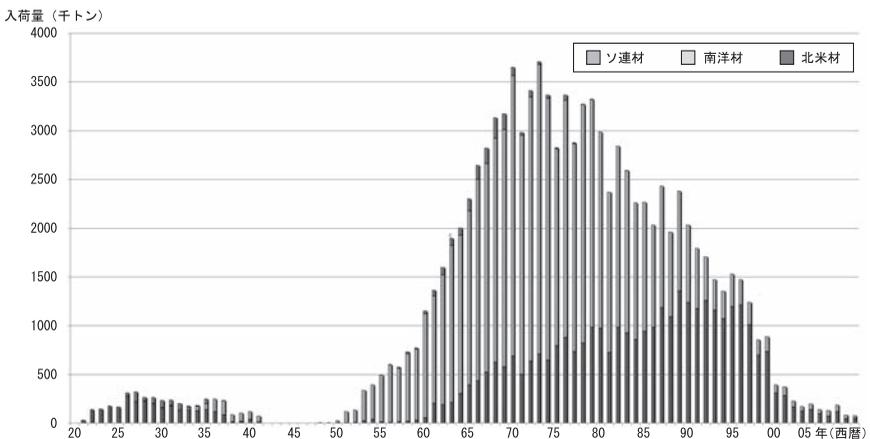


図1 主要外材の名古屋港入荷量推移

隻しか入港しない。このような筏師の仕事自体の減少に起因する、筏師という職業集団の縮小という事態が悩みのひとつである。

保存活動を行う組織や体制についての悩みもある。現在は保存活動に一般市民は参加していない。保存団体に所属して活動しているのは関係者のみであって市民の参加はない。名古屋港の筏師一本乗りと類似した民俗文化財として東京の「木場の角乗^{かくのり}」がある。木場では保存会に一般市民が所属して保存活動に参加している。また角乗の稽古場として専用プールがつくられているが、名古屋では適当な練習の場を確保するのが難しいという。一般市民が参加して一本乗りの練習を行うことを想定した場合、それなりの環境が整っていないと練習場としては使えない。例えば、現在の一本乗りの会場となっている名古屋港ガーデン埠頭は水深が深過ぎ、水質も清浄ではない。付近の一般プールを借りることを検討したこともあるが、プールの破損の危惧などを理由に断られた経験もあり、借りることも困難な状況にある。プールをつくることになっても、用地や維持・管理の問題をクリアしなければならない。適当な条件を備えた練習環境を確保できている木場に対して羨望のまなざしが向けられるのである。

さらに資金面の問題もある。保存活動にはそれなりの費用が必要となる。一本乗り大会を開催するのに100万円以上かかる経費の7割を負担する現在の状況に加えて、保存活動を拡充しようとする場合、保存団体の負担はさらに膨らむ可能性が高くなる。

パラドクス

木場の角乗も地方自治体から文化財としての指定を受け、保存活動が行われている。1952（昭和27）年に東京都文化保存条例に基づき、都指定の無形文化財となり、1981（昭和56）年には江東区の文化財として登録された。現在は江東区民祭りの協賛事業である民俗芸能大会で「木場の角乗」が公開されている。そのための保存会による稽古が都立木場公園内の角乗池と呼ばれる専用プールで冬場を除く毎週日曜に行われている。保存の主体は1952（昭和27）年設立の東京木場角乗保存会であり、現会員数は約25名である。深川木場内で樹種の格

付け、仕分け、検量、管理、運搬、陳列、保管に従事する職業を川並かわなみと呼んだが、その元川並約10名のほか、一般市民も保存会メンバーとなって活動を行っており、子供や女性、若者らも参加している⁵(写真3)。木場では水上で木材を取り扱う木材会社はすでに消えており、現役の川並は存在していない。つまり職業としての川並は消え去り、川並の技術を涵養してきた仕事の場という文化を継承する上での要件は失われてしまっている。

木場の角乗と名古屋港の一本乗りは対照的であるといえよう。保存会活動はといえば、一般市民が参加し、活動的である木場に対し、名古屋では保存会会員は筏業の関係者のみによって構成されており、基本的に一般市民の参加はなく、保存活動に一般市民が参加するような仕組みや環境も整えられていない。一方で、木場の現状に比べて、名古屋ではわずかに2社となってしまっているとはいえ、筏業を営む木材会社が存続しており、現役の筏師として日常的に仕事に携わる社員も数十名存在している。

一見したところでは、条件面の比較から判断すれば、名古屋は筏文化の保存



写真3 木場の角乗。専用プールで子どもが演技する様子

5 木場では、「川並」と「筏師」は明確に区別されているという。原木の水上輸送を主な内容とするのが筏師であるとされる(川藤 2009)。ちなみに「筏師」の呼称は1954(昭和29)年に正式な職業名として誕生したが、それは国勢調査の際に筏作業員が職名をどのように記載したらよいのか困惑したという事情を受けて、港湾荷役関係業者の会合において統一名称として発案されて決定したものであるという(日本いかだ史研究会 1976)。

・継承に有利な条件に恵まれていると考えられてもよいのではないだろうか。木材会社が存続しており、現役の筏師が存在しているのであるから。文化が継承される条件を考えた場合、保存会だけが文化保存の役回りをするものではない。一本乗りや角乗の場合、業界や企業という労働の場＝職場世界、技能を持った個人、行政（文化財指定と助成金の交付）などの諸要素が複合的に関連し合うなかで保存環境が条件づけられてくるものであろう。

そもそも木材を取り扱う職業技能文化の一部として派生したものが一本乗りや角乗である。その職業技能を涵養してきた文化的背景としての職業や仕事の場が現存しているということは、文化的継承に決定的に有利な条件として作用するはずであろう。

それにもかかわらず、名古屋の関係者は保存活動へ市民を動員させることができている現状や、そのための環境整備が困難であるという状況について頭を抱えているのである。つまり、筏文化を保存継承する従来の文脈（＝仕事の場や労働世界）を保ち得ているにもかかわらず、それ以外の条件（＝市民参加の困難性）について思い煩っているのである。木場のケースは、そうした文化的保存の従来の文脈を喪失させてしまった結果として、唯一残された文化保存の手段としての市民組織による保存活動に勤しまざるを得ない状況に追い込まれているとも取れるが、その木場に対して、羨望のまなざしを向けるというパラドクスが生じているのである。

5 複合的な職能の総体としての筏師文化

一本乗り以外に求められる筏師としての職能

「筏師一本乗り」について論じてきたが、これまでで取り上げてきたのは市指定の「民俗文化財」として保存・公開されている筏師の文化であった。文化財として公開されている筏師の文化は、筏師にとって必要とされる複合的で総合的なさまざまな職業世界の技能や知識のなかでは一部であったり、そこから派生したりしたものであるに過ぎない。

確かに一本乗りの技術は、筏師にとって欠くべからざる重要な基礎的技術であるという側面はある。最盛期の筏師たちは新人時代に仕事を終えた17時から

日没まで、パンやラーメンで空腹をしのぎながらその練習を積み重ねたと回想する。それは祭りで披露することを目的としていたというよりも、仕事のため、会社のため、そして自分のためであったという。一本乗りの技術習得は自分の仕事や収入に直結し、同期のライバルとの仕事上の競争が懸かった喫緊の課題であった。仕事をより早く、より多くこなすために技術の向上が求められていたのであって、文化財の保存のためではなかった。

また同様に、以前の一本乗り大会は文化保存の活動としての性格というよりも、仕事の現場でより多く、より早く仕事をこなすために必要とされる技術を競い合う競技大会としての性格が色濃かった。全種目が採点方式の競技として催され、チームが組まれる団体戦と個人戦が行われ、得点による勝敗があった。そもそも大会に出場するには会社から選抜されなければならない、選手として選ばれるようになるまでには大いに苦勞したのだという。大会での成績が給料に反映する制度を取り入れていた会社もあったようで、「みんな勝つことに必死」でかなり闘争心を煽られて練習にも熱が入ったという。特に大会の花形であった競技のひとつにログ・ローリングというものがある。これは水面に浮かぶ一本の丸太に二人が乗り、丸太廻しを足先で前後の切り換えとスピードをコントロールしながら、相手を落として勝敗を争う競技である。世界大会にも会社から選手が派遣され、カナダ・バンクーバーで行われた大会での優勝者を輩出したこともあるのだが、それほどまで競技性に力が注がれていたのである。

このように昭和50年代初期までは競技大会としての性格が強かったのであるが、以降は競技種目がなくなり模範演技を披露するかたちが変わった。その結果、現在の大会で披露されている演目は、観客に「見てもらう」ことを前提条件とする曲芸的な色彩が強くなってきており、筏師の仕事の現場で日常的に使われているような技能を競い合うことで、その技術を純粋に見せようとするものではなくってきている。

そもそも木材に乗って移動することができるという技術のみでは筏師の仕事は遂行できない。その他にも広範で複合的、総合的な技術や知識や経験などを必要としている。筏師の仕事の内容には筏を組んだり、木材をけん引して動かしたり、木材を仕分けしたり、木材の樹種を見分けたり、木材の寸法を測った

り、木材の状態を鑑定したりと実に様々なものが含まれている。例えば、現場ではロープの縛り方を知らなければ仕事にならないし、南洋から輸入される外材の種類は何百種類とあり、これを覚えるのには相当な勉強が必要であろうし、作業現場の監督は風や潮の流れを読んで作業の指図をしなければならず、積み重ねられた知識や経験が必要とされる。木材の状態を鑑定するには相当の経験や知識が必要とされ、においや色などを総合して腐敗していないかを判断するのだが、15年ほどの筏師のキャリアがあってもなかなかできるものではないという（写真4・写真5）。



写真4 貯木場の様子



写真5 原木の検査を行う

筏師一本乗り大会での大会後の会場の撤収作業を見ていて、手際の良さとスピードに筆者らは圧倒された。大会で使用された資材や足場となっていた巨大な筏は片付けられて沖へと曳航されていったが、撤収作業はものの30分程で行われ、筏師達の作業には淀みがなく、数十人で行われる集団作業に一条の乱れも見受けられなかった。この様子について後日話を伺ったところ、細かく明確な指示が出されているのではなく、「阿吽の呼吸」で「お互いに」分かり合いながら「自ずと分業されていく」のだという（写真6）。このように全体の作業の流れを見通しながら、その場で必要な個人の役割を臨機応変に判断して、適切な仕事をできるようにすることも筏師という職業世界で必要とされることである。



写真6 会場を撤収して筏を曳航する様子

以上のように、筏師の文化とは「筏師一本乗り」という民俗文化財だけを以って代表されるべきものではなく、多様で複合的な職能の総体として捉えるべきものなのである。

6 文化財化の帰結／民俗文化化の帰結

文化財化の帰結

「筏師一本乗り」という文化は、多様で複合的な職能の総体としての筏師文

化という文化的素地との連続性を前提としながら捉えられるべきものである。しかるに、筏文化の総体から「筏師一本乗り」が文化財として断片的に切り取られて、非連続的なものとなってしまっている。これが文化財化のもたらしたひとつの帰結であろう。文化財化はある文化とその文化的母体との連続性を断ち切ろうとする非連続化の力動として作用することで、距離化のモメントをもたらすといえよう。一本乗りの文化を涵養してきた文化的背景としての筏師の職業世界との連続性が分断されて距離化されたことが、文化財の保全実践において、その文化的背景に目を向けさせることを阻害させてしまう斥力として作用しているといえるだろう。文化財化による文化的母体との距離化の帰結として、文化財として断片化されたものだけを延命させるエートスを充溢させた文化保存の手段としての市民的保存活動を志向するようになるのであり、また、その資源となりうる市民的支持を取り付けようとするようになるのである。そして市民的支持の獲得に順機能する文化の公開には積極的であろうとするようになる。一般市民にもっと一本乗りの文化を認知してもらって浸透させたい、そのための市民参加による保存活動に力を注ぎたい。かくして、「筏師一本乗り」という文化財の保存実践において、保ち得ている文化保存に有利な条件には盲目的になりがちである一方で、市民参加型の保存活動への羨望が高じるといったパラドクスの状況が生じるのである。このような状況をもたらすのが文化財化の帰結といえよう。

民俗文化化の帰結

「筏師一本乗り」の文化は、民俗文化化されているともいえる。つまり民俗文化的な価値づけをともなっているのである。民俗文化は近代以前との連続性が重視されるという価値づけをともないがちである。「筏師一本乗り」の文化は、その歴史や伝統として近世期やそれ以前の時代との連続性を強調されている。

しかし、一本乗りの文化については明治以降の近代の歴史からの影響も見ておく必要があるだろう。木曾川からの筏の流送は昭和10年頃を最後に廃止されて、木材輸送は鉄道やトラックに取って代わり、海運の発達によって名古屋港

には船で木材が和歌山、四国、九州、北海道などの内地から移入されるようになった。明治には樺太材、大正には米材、ロシア材、南洋材が海外から輸入されはじめるようになり、入荷量は激増していった。昭和40年代以降は外材輸入が大半を占めるようになった。輸入される外材は内地材と比べて、種類が格段に多くなり、また大径木が増えた。それにともない樹種を特定するための知識を必要とするようになり、また大径木を取り扱う技術を向上させた（写真7・写真8）。近代の名古屋は全国有数の「木材集散地」となり消費地となった。それとともに貯木施設の拡充整備が課題となり、名港貯木場、加福貯木場、八

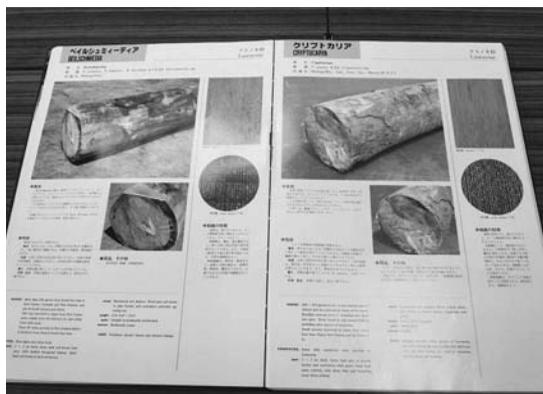


写真7 輸入原木図鑑



写真8 輸入原木の見本

号地貯木場、西部木材港などが開設されていった。

しかし昭和40年代をピークに木材の取扱量は下降線をたどる。減少し続ける原木入荷量に対して、余剰となった貯木施設の再編整備が進められ、使われなくなった貯木場は閉鎖され埋め立てられていった。

近代産業としての木材産業は肥大化していき、ある時期を境に縮小していった。そのドラスティックな変化のなかで筏師文化がほとんど影響を受けることなく、近代以前の様態を保ち続けてきているとは考えにくい。筏文化は近現代から大きな影響を受けてきていると見るのが妥当であろう。筏師文化における近代的な変容としては樹種の多様化、大径木の増加への対応や適応を先に挙げた。その他には法令の変化による筏師の仕事内容の分業化という再編の影響も挙げられる。だが、残念ながら名古屋港の筏文化における近代的な変容についてはこれまであまり関心を払われてこなかったため、それら以外にどのような近代のインパクトがあったのかは詳らかにはない。ここでは可能性の指摘にとどめざるを得ないが、機械化や近代的な道具の登場、筏師のサラリーマン化や通勤圏の拡大、人間関係の変容や企業文化などによる影響の可能性を考えることができるだろう。

筏文化を支えたのは何か

このようにしてみると、筏文化は木曾林業や江戸期に遡る木材取り扱いの技術を淵源とする部分を有するのではあるが、より近い時代である明治以降の木材産業界が拡大・縮小していくなかで形成・維持・変容し続けてきた文化であると捉えるべきなのではないのか、少なくともそのような視点があってもよいのではないだろうかという考えに至る。近代以降は外材の輸入が増え、それまでには存在していなかったような樹種が何百種と運び込まれてくるようになり、樹種の見極めは格段に難しくなっているし、大径木の取り扱いが増えたことも仕事内容に変化をもたらしたのではないだろうかと推測される。

また「木の都市」と呼ばれるほどの木材集積地であり消費地でもあった名古屋では、貯木場での木材を大量に素早く捌いていくことが筏師の仕事として求められた。筏師に求められる技能のひとつはスピードでもあった。スピードと

いう技能の追求は、文化財披露の場である「一本乗り大会」においても、競争というかたちで追求されることになった。優勝者には旗やトロフィーが贈られて讃えられ、給料や職業能力の評価に直結するような制度化がなされ、筏師達はその技能を競い合いながら追求していった。

このような観点からすれば、名古屋港の筏文化を近代産業遺産としての意味合いも多分にもっているものと捉えなおし、近代木材産業の世界が筏文化にどのような影響を与えてきたのかを検討する必要があることに気付かされるだろう。

7 文化財を取り巻く状況

文化財の飽和と世界遺産化

ここまで文化財として文化を保存しようとするとき、保存実践においてどのような力動が作用しがちであるのかをみてきた。文化財化による帰結として、その文化を保存継承するのに順機能的な文脈に対して、盲目的になりがちにさせてしまうような保存の実践の様態に陥りやすいことを指摘した。そのことは同時に、文化財化した断片的な文化を選別的に保存しようとする市民参加型の文化保存の実践を志向させる。文化財の保存の実践においては、市民的支持を取り付けようとするベクトルのエートスが作動しているのである。

このような文化の制度に起因する社会的な力が働くことによって、次のような事態が生起していることの解釈が可能となった。すなわち、名古屋の筏師一本乗りの文化保存の実践の主体が、筏師文化の保存継承にとって有利であるはずの条件（＝仕事の間や労働世界）を保ち得ているにもかかわらず、それ以外の条件（＝市民参加の困難性）について頭を悩ませ、その文脈を喪失して市民組織による保存活動という手段に依存せざるを得ない木場を羨望するという逆説が生じていることについての解釈である。

この逆説について、ここではさらに別の角度からの解釈を付け加えておきたい。

文化財は文化保護制度によって次々に拡充されるなかで、今や「全国に文化

財があふれ返っている状況」(小川 2007)にある。文化財の飽和は、文化財のインフレーションであり、その結果、文化財の価値が下落しているのである。文化財保護制度による権威づけだけでは、文化の価値を担保することが困難な状況が生み出されているのである。一方で、文化財としての保存に向けた取り組みについては依然として求め続けられる。文化財の保存実践を行う際の資源である市民的支持を、文化財であるというだけではもはやその価値が担保されなくなってしまった文化財へと集めなければならないという困難なミッションだけは要請され続けるのである。

このような状況にさらに覆い被さっているのが、現今の世界遺産化の流れである。

「飽和状態に達した「文化財」カテゴリーを超える、さらに高次の聖性を社会が渴望した結果として、世界遺産が注目されている」(小川 同上)のである。世界遺産というグローバルな権威づけの制度が出現したことによって、ドメスティックな権威づけの制度でしかない文化財は価値を相対的に下落させる。

8 おわりに

文化の制度の問題

文化の制度という社会的な条件が、文化を保存しようとする実践にどのような力となって作用するのかについて本稿では考察を進めてきた。

文化財保護の制度は、文化財の保存と公開を促す文化装置ではあるが、その文化を涵養する背景の世界との連続性には重きを置かず、その世界を保存しようとする力動には乏しい。場合によっては、むしろそうした文化的な揺籃や涵養の素地的世界から目を背けさせて蔑ろにするような力となって作用することによって、文化の継承の可能性をより隘路へと追い込むような阻害的なモメントとして作動しているという逆機能的な蓋然性を指摘した。

背景をも含んで連続性や関係性といった、いわば生態学的な観点から、多様で複合的な総体的文化として把握する方法を、文化保存の実践において求める

ことが課題となってくるのではないだろうか。

酒井は筏文化に着目した総合的な学びを提唱し、実践していることを報告しているが、これは連続性や関係性を保持したまま、多様で複合的な総体的文化として捉えようとする試みのひとつであるといえよう（酒井 2005a 2005b 2006）。ここでは、文化を保存しようとする場面でどのような力が働いているのかを見ようとする視座から、文化の保存実践にアプローチしようとしてきた。そこで浮かび上がってきた力を見ようとすることも含めて総合的に捉えなおすことは、文化の保存の場面をより多面的でプロブレマティックなものとして捉えることに繋がるであろう。

参考文献

- 小川伸彦、2002、「モノと記憶の保存」荻野昌弘編『文化遺産の社会学——ルーヴル美術館から原爆ドームまで——』新曜社
- 小川伸彦、2007、「文化の遺産化——「文化財」はどこから来てどこへゆくのか——」小川伸彦・山泰幸編『現代文化の社会学入門——テーマと出会う、問いを深める——』ミネルヴァ書房
- 川藤健司、2009、「『木場角乗保存会』活動による木場川並技能の伝承と実践」『建築雑誌』124（1593）
- 神崎宣武、1988、『「地域おこし」のフォークロア』ぎょうせい
- 日本いかだ史研究会、1976、『いかだの歴史』日本いかだ史研究会
- 愛知筏業連合会、1962、『「筏一本乗り」の沿革と現状について』名古屋港湾福利厚生協会
- 酒井喜八郎、2005a、「総合学習「地域に残る筏文化から名古屋のまちの発展を支えてきた堀川の学習へ」」『「住まい・まち学習」実践報告・論文集』（6）
- 酒井喜八郎、2005b、「筏文化に着目した堀川の総合学習と名古屋のまちづくりへの提言」『地域問題研究』（69）
- 酒井喜八郎、2006、「筏文化に着目した堀川の総合学習と名古屋のまちづくりへの提言（その2）」『地域問題研究』（72）